東北大学 TOHOKU UNIVERSITY
社会知性の開発をめざす 石巻専修大学
尚絅学院大学 SHOKEI GAKUIN UNIVERSITY

Press Release

2024 年 12 月 23 日

報道機関　各位

国立大学法人東北大学
学校法人専修大学石巻専修大学
学校法人尚絅学院尚絅学院大学

災害後の歴史資料の救出・保存支援は被災者の心の復興に寄与
—統計的データ分析で裏付け—

【発表のポイント】

- 東日本大震災によって個人が所有する史料が被災した後、第三者によって史料の救出・保存支援を受けた人たちに焦点を当て、この支援が史料所有者の心の復興にどのように影響したか、心理学者（臨床心理士資格保有者）・歴史学者の連携で明らかにしました。
- 災害後の史料の救出・保存支援が被災者のレジリエンス（災害などの困難に適応すること）に寄与し得ることを、統計的データ分析で裏付けました。
- 特に、被災後３カ月以内に支援を受けた人たちの多くは、支援や史料、震災経験を肯定的に捉え、その後の地域社会とのかかわりも多いことがわかりました。一方、支援を受けた時期が遅かった人たちは経験を否定的に捉える傾向がありました。被災程度は回答に影響していませんでした。

【概要】

日本では、歴史文化資料（史料）の多くを地域の個人が所有しています。

東北大学災害科学国際研究所の上山眞知子特任教授（客員）らによる研究グループは、所有する史料が東日本大震災によって被災し、NPO 法人による史料の救出・保存支援を受けた人たちの協力を得て、この支援が史料所有者に及ぼした影響を調査しました。研究協力者に、支援から連想されるイメージを話してもらい、その内容を統計的に分析した結果、災害後の史料の救出・保存支援が被災者のレジリエンスに寄与し得ることが統計的データ分析で裏付けられました。被災後 3 カ月以内に支援を受けた人たちは震災経験を肯定的に捉える傾向があり、救出された史料を活用して地域社会の復興に取り組んだ人もいた一方で、支援時期が遅かった人たちは経験を否定的に捉える傾向がありました。被災程度は回答に影響していませんでした。

本研究成果は 2024 年 12 月 1 日、Journal of Disaster Research vol.19 no.6 に掲載されました。

【詳細な説明】

日本では、古文書など貴重な歴史文化資料（史料）の多くを、先祖の史料を受け継ぐ形で地域の個人が所有しています。本研究は、東日本大震災によって所有する史料が被災した後、第三者によって史料の救出・保存支援を受けた人たちに焦点を当て、これらの支援が史料の所有者にどのような影響を及ぼしたかを、心理学者・臨床心理士・歴史学者の連携で明らかにしました。

研究に協力したのは、史料の所有者 20 人です。全員、2011 年の東日本大震災で被災し、うち 10 人は自宅が全壊し、残る 10 人は半壊でした。平均年齢は 68.5 歳で、200 年以上の家系を持つ人は 13 人、100～200 年の家系を持つ人は 7 人でした。全員が被災後に NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク（注）による史料の救出・保存支援を受けましたが、支援を受けた時期は異なりました。

本研究では、まず、臨床心理士が上記の 20 人に半構造化面接調査を行いました。全員に、NPO による支援から連想される言葉やイメージを自由に話してもらった上で、偏りが出ないよう、得られた語句をランダムに組み合わせ直しました。次に、全員にそれらの語句について「非常に近い」から「非常に遠い」まで 7 段階で評価してもらい、各項目は「肯定的」「否定的」「どちらでもない」のいずれに当てはまるかを評定してもらいました。さらに、話された言葉やイメージについて互いに似たものをグループ化した上で、研究協力者に、全体および各グループにタイトルをつけて表現してもらいました。

得られた内容を被災の程度（自宅が全壊か半壊か）、支援を受けた時期（被災から 3 カ月以内か以後か）に着目し、t検定、χ^2（カイ二乗）検定で統計的に分析した結果、被災後 3 カ月以内に支援を受けた人については、史料の救出・保存活動について、「感謝」「今、自分がここにいる理由がわかった」「震災は歴史の一部であり、次世代に伝えたい」等、経験を肯定的に表現する傾向がありました。一方で、支援を受けたのが被災から 3 カ月より後であった人たちは、「もうどうでもよい」「震災がなければよかった」など、経験を否定的に捉える傾向がありました。被災の程度（自宅が全壊か半壊か）は、回答が肯定的・否定的になるかどうかに関係していませんでした。肯定的な回答をした人たちの中には、救出された史料を活用してその後の地域社会の復興に取り組んだ人もいました。

かつて歴史文化遺産は災害時に保護すべき対象とのみ捉えられていましたが、近年、「仙台防災枠組 2015-2030」をはじめとする国際アジェンダにおいて、歴史文化遺産は被災者のレジリエンスを育む拠り所となると認識されるようになりました。

史料救出・保存支援に限らず、災害後の心理社会的支援全般について、その効果を客観的に評価する方法は確立されておらず、研究も進んでいませんでした。本研究は、災害後の史料救出・保存支援が被災者の心の復興に寄与し得ることを心理学のアプローチを用いて統計的データ分析から裏付けたもので、研

究者のみならず被災者支援にかかわる人々に貴重な知見を提供しています。

史料の救出・保存活動へのイメージ

	被災程度：全壊	被災程度：半壊	カイ二乗	３カ月以内に支援を受けた	３カ月以後に支援を受けた	カイ二乗
史料救出／肯定的イメージ	7 (0.5)	6 (-0.5)	0.22	11 (3.6)	2 (-3.6)	13.16***
史料救出／否定的イメージ	3 (-0.5)	4 (0.5)		0 (-3.6)	7 (3.6)	
感謝／肯定的イメージ	10 (2.2)	6 (-2.2)	5.00*	11 (2.5)	5 (-2.5)	6.11**
感謝／否定的イメージ	0 (-2.2)	4 (2.2)		0 (-2.5)	4 (2.5)	
歴史／肯定的イメージ	6 (0.9)	4 (-0.9)	0.20	7 (1.3)	6 (-1.3)	3.43*
歴史／否定的イメージ	4 (-0.9)	6 (0.6)		4 (-1.3)	3 (1.3)	

カッコ内は調整済み残差
カイ二乗検定：*p<.1 **p<0.5 ***p<.0001

図 1. 史料の救出・保存活動から連想する言葉を「史料救出」「感謝」「歴史」のカテゴリーに分けた際、それぞれに対する肯定的・否定的イメージの出現を比較した表。被災の程度（全壊または半壊）では大きな差は見られないが、支援を受けた時期に着目すると、3 カ月以内に支援を受けた群のほうが肯定的イメージの出現が有意に高かった。

図 2. 史料救出活動の様子。2011 年 4 月 8 日、宮城県石巻市、斎藤秀一氏撮影

【謝辞】
本研究は JSPS 科研費 JP16K13277 の助成を受けたものです。また、東北大学災害科学国際研究所災害レジリエンス共創センターの助成により一部支援されました。

【用語説明】
注. NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク：自然災害発生時の歴史資料の救済・保全活動を行う団体、通称「宮城資料ネット」。2003 年 7 月の宮城県北部連続地震を契機に仙台の歴史研究者を中心に設立され、以来、歴史資料の救出・保存に携わる研究者と地域の史料所有者や史料保全活動に携わる市民をつなぐ活動を展開してきた。2007 年に NPO 法人化され、現在は東北大学災害科学国際研究所歴史文化遺産保全学分野内に事務局が置かれている。

【論文情報】
タイトル：A Psychometric Evaluation of Preserving Cultural Heritage as a Form of Psychosocial Support
Machiko Kamiyama, Masae Sato, Reika Ichijo, Daisuke Sato, and John Morris
掲載誌：Journal of Disaster Research vol.19 no.6, pp. 886-895
DOI：https://doi.org/10.20965/jdr.2024.p0886

責任著者：上山眞知子　東北大学災害科学国際研究所　特任教授（客員）（心理学、臨床心理士）
著　　者：佐藤正恵　石巻専修大学　教授（心理学、臨床心理士）
一條玲香　尚絅学院大学　講師（心理学、臨床心理士）
佐藤大介　東北大学災害科学国際研究所　准教授（歴史学）
モリスジョン　東北大学災害科学国際研究所　特任教授（客員）（歴史学）

【問い合わせ先】
東北大学災害科学国際研究所　広報室
TEL: 022-752-2049
Email: irides-pr@grp.tohoku.ac.jp